

---

# 京都の冬物語

尾束 珠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

京都の冬物語

### 【Nコード】

N4669G

### 【作者名】

尾束 珠

### 【あらすじ】

27歳になつた私に人生の転機は訪れる。底冷えの京都の冬に降る牡丹雪に、七色に輝く蝶が飛んでいた。京都の冬は私に、やがて来る春の足音を聞かせてくれた……。

(前書き)

京都の”春”  
”夏”  
”秋”  
”冬”  
”に続く”  
”の最終の物語です。

冬の京都は、”底冷え”という独特の言葉に表現される。

雪化粧するお寺の瓦屋根や細い路地は、そこはかかない趣があるが、雪に慣れていない京都の人は、車の交通渋滞を巻き起こす事もある。私は雪が降って音のなくなった、モノトーンの京都の町並みが好きだった。

”スキモト アンナ杉本安奈” 27歳。7年勤めた会社を辞めた、私の名前だった。

11月の末に、私は短大卒業後に勤務していた会社を円満退職した。来年の2月に、25歳の秋から付き合っていた陶芸家の”ムラオカ シンタ村岡新太郎”と結婚が決まったからだ。

私は2年間の恋愛を経て、京都で新たな彼との生活をスタートさせることになった。

彼との交際は、私が趣味で通っていた信楽焼の陶芸教室から始まった。

彼は教室の先生であったが、同じ過去の痛みを持つ者同士として、ささやかな交流が始まり、いつの間にか将来の設計図を二人で見つめていた。

情熱的に燃え上がった恋愛ではなかったが、大人と男女の分別ある恋だった。

今年の六月に彼は、私の両親に結婚の承諾を得に家を訪れ、無言の父に手を焼きながらも、承諾を受けた。

両親の承諾を取るのに、陰で後押しをしたのが私の祖母だった。祖母は、彼の性格や才能、そして同じ痛みがわかる若者として結婚に賛成した。

年が明ければ、彼と私は新居のマンションを探し、これからの彼の活動の基盤となる、工房やギャラリーを数年掛けて探す予定だった。工房で作った作品を亀岡で焼き、ギャラリーに展示して売る事が夢だった。

勿論、今迄の陶芸教室も継続するつもりで考えていた。

12月31日、彼と私は東山の祖母の家に来ていた。

正月の餅や飾り物などを母から頼まれ、彼と一緒に持って来ていた。ここ2年の歳月は、祖母の家の中に多くの信楽焼きの壺や皿や置物を増やさせていた。

それは、私の作品もさることながら彼の作品も多く含んでいた。

祖母は、ホーム炬燵を囲んで座る二人に言った。

「あんさんら、二人の新居はどないしやありますんや？」

私は、祖母に答えた。

「年明けに、手ごろなマンションを、どこかで探そうと思ってるんや」

祖母は、頷き言った。

「ほんなら、村岡はんの仕事場とお店は、どないしやありますのんや？」

私は、祖母に説明した。

「陶芸教室も借りてるから、いつぺんに無理やし、余裕が出来てからにしようと思ってる」

彼と私は話し合って、ギャラリーの開店は5年計画で考えていた。陶芸教室は今迄通りに行う事で、食べるだけならやって行ける。新居を借りることで発生する家賃は、私が再就職することによっていける。二人で5年働いて、彼の工房とギャラリーを市内に借りることを考えていた。

祖母は、突然二人に命令するように言った。

「二人とも、ようお聞きやす。あんたらは、結婚しやはったら、この家に住みなはれ」

「ほんなら家賃は、要らんようになりますやろ？」

「それから、この家の前半分を改築して、仕事場とお店を作りなはれ」

「それぐらいの広さは充分あるし、わてが、改築費くらいは持つてますさけ、大丈夫だす」

彼と私は、あつけに取られて祖母の顔を見ているだけだった。

確かに、この家の玄関と下座敷と納戸を店に改築して、中座敷を仕事場にすれば立派なギャラリーと工房になる。

そして、祖母の部屋と奥座敷を残しても、2階に2部屋あるので住むには十分である。

奥に続く土間を改造すればキッチンも、新しく使いやすいものになる。

私は、彼の驚いている顔を見ながら、祖母に言った。

「おばあちゃん。私等に気遣わんでもええしな。ここは、おばあちゃんの家やん」

祖母は私を見ながら笑顔で言った。

「わては、安奈に以前に言いましたやろ？この家は、安奈にあげる

家どす」

「わざわざ、外でしんどい目して家賃払わんでも、此処に住んだら宜しおす」

「何れは、安奈の家でっさかいな。・・・そうおしやす。」

確かに、そうすることによって、マンションを借りる家賃も、工房やギャラリーを借りる家賃も要らなくなる。

そして、この東山の町家造りは、ギャラリーにすることは面白い発想かも知れない。

また、陶芸教室に借りているビルにも歩いて5分の距離であるのは捨てがたい。

祖母は、何度も、そうするように二人に言った。

彼と私は、余りにも好都合な話だったが、祖母の事を案じて迷っていた。

夜遅くまで三人で話し合った結果、祖母の言う通りになることは決まった。

祖母は、大晦日の夜遅くに私の両親に電話を掛け、その計画を無理やり両親に承諾させた。

彼と私の新生活は、東山の祖母の家を改築して、新居と工房とギャラリーを作ることになった。

そして、祖母の部屋と奥座敷はそのまま残り、祖母と同居することに決めた。

彼は、祖母の提案に深く感謝し、祖母と暮らせることを喜んでいた。

彼と私は祖母と共に、今日の大晦日と明日の元旦は、祖母の家で過ごすことにしていた。

祖母は、二人が自分の提案に同意したことが嬉しそうで上機嫌だった。

やがて、大晦日の除夜の鐘があちこちで鳴り響き、辺りは鐘の音だけの静寂に包まれた。

部屋の障子を開くと、中庭に大粒の牡丹雪がしきりに舞い落ちていた。

私は、祖母に感謝の念を込めながら、除夜の鐘を一つ一つ数えるように聞いていた。

私は彼が風呂に入っている間に、思い出深い奥座敷から中庭に落ちる雪を見ていた。

今年も、こうして一年が暮れて行くんだなと、感慨深く座敷を見渡した。

それとなく見回した部屋の中で、視線の先にキラリと光る反射物を見つけた。

それは、座敷に置いてある茶箆筥の棚の上で輝いていた。

私は光る物を手にとって、懐かしい眼差しで、じっと見つめていた。それは、棒の先に止まって羽を広げている蝶を模った”かんざし”だった。

忘れもしない、5年前の祇園祭で亮太に買って貰ったものだった。その”かんざし”を髪に挿して、五山の送り火に彼を見送った記憶は消せはしない。

祖母の家の奥座敷で、眠っていた亮太の”かんざし”は、

私に何かを語りかけるために、光っていたのだと私は思った。

”かんざし”を両手の上に置いて、長い時間眺めている自分を別の自分が見ていた。

5年前に亡くなった亮太は、今の私を天国から見て、どう思っているのだろうと私は思った。

奥座敷に入ってくる祖母の声がした。

「安奈はん。年越しのお蕎麦でも作ったらどうどすいな？・・・」  
じっと”かんざし”見て、黙って座っている私を見下ろして、祖母  
が言った。

「あら、それは・・・遠い夏の日から、飛んできた綺麗な蝶どすな  
あ」

私は、祖母を見上げて言った。

「キラツと光ったんで、何やるって思ったら、これやったわ・・・」

祖母は暫く立つたままで、そっと私に言った。

「亮太はんが遠いところから、蝶になって、あんたに、お祝い言いに  
来はったんどっしやるな」

私は祖母の言葉を聞きながら、そうかもしれないと思った。  
そういうことは信じない私だったが、そう思ったほうが素直な感覚  
だと思った。

もし本当に亮太が、私に”おめでとう”と言ってくれているなら、  
亮太は、どんな微笑で、どんな声で、どんな目で言っているのだろ  
うと思った。

私は、蝶の”かんざし”を、暫く見つめてから、静かに言った。

「亮太、お祝い言いに来てくれたんか？ 私、幸せになるしな。安  
心してな」

「ほんなら、もう、帰ってええんやで・・・亮太、有難うな。気付  
けて帰りや・・・」

私は、そう言って祖母に亮太の残した”かんざし”を渡した。

祖母は、”かんざし”を小さな桐の箱に入れて水引で結んだ。

祖母は、桐の箱を初詣に行く八坂神社に、お返しするようにと小声

で私に言った。

私は頷いて、桐の箱を手に取り中庭に落ちてくる雪を見上げていた。私の見つめる中庭の暗い空間を、綺麗に光る七色の蝶が、金色の粉を撒き散らしながら、

天を目指して飛んでいく姿が、私の瞼に見えたような気がした。

その蝶は、ゆらゆらと頼りない軌跡を残しながら、

名残惜しそうに一度だけ舞い戻って羽を羽ばたかせ、そして優雅に飛び去って行った。

年が明けて、結婚式の日が近づく慌しさと共に、

祖母の家も、増改築の業者の出入りで慌しく賑やかだった。

祖母の事を考えて、出来る限りバリアフリーに補修し、

新しいフローリングや、ホルマリンの出ない和紙のクロスなどが張られた。

ギャラリーや工房も、京都で伐採された地元の杉材や檜材で仕上げられ、

北山杉の化粧柱も、アクセントに数本使われた。

シックな木調のギャラリーに、明るい先端の照明器具が配置され、

外観は以前の町家の風情を残し、内観はモダンな建物となった。

二月の末に彼と私は、ささやかな挙式を挙げて、祖母の家で新婚生活をスタートさせた。

彼は、従来の陶芸教室を存続させながら、精力的にギャラリーの充実を図った。

自分の作品以外にも、自分の師匠の作品や友人の作品も展示するスペースを作り、

彼の友人の西陣織の作家の作品も並べられた。

噂を聞いてやってきた、清水焼の作家や京都の版画家などの作品も並べられた。

京都の伝統を継承する作家や、京都で活動する色んな芸術家の作品を、

このギャラリーに並べる事によって、相乗効果も期待できると思った。

単なる彼の信楽焼きだけのギャラリーでは無くなった。

彼と私は、このギャラリーに色んな人たちが集まり、語り合える空間として、

そして情報交換と交流できる空間になれば、素晴らしい事だと思っていた。

インターネットのホームページも作成し、京都へ来る観光客の人々や、

京都に住む若者達にギャラリーの存在を伝える手筈も取った。

私は彼に、ギャラリーの片隅に小さなスペースを貰って、自分で焼いた陶器の小物を並べる事にした。

その小さなスペースは、女性が好みそうな小物やアクセサリーを中心に並べた。

その小物の評判が良く、焼いても焼いても追いつかないほどだった。

私は、彼が陶芸教室に行っている間は、ギャラリーを見守り、

彼がギャラリーに居る時は、家事をしたり祖母と話をしたりして過ごした。

そして、その間を縫って自分の小物の作品を工房で作っていった。

箸置、携帯ストラップ、陶器のワイングラス、ブローチ・ペンダントなども作った。

私の作った小物には共通のデザインが施されていた。

それは、全ての作品に”蝶”がデザインされているか、作品そのものが蝶の形をしていた。

その蝶は、時にはシックなデザインだったり、時には七色に輝いていたりした。

私の作品の”蝶”は、優雅な羽を広げ休んでいたりと、華やかに作品の中を舞っていた。

私は、ギャラリーで観光客と話をする彼が、可笑しくてたまらなかった。

何故なら、京都古来の伝統や京都のアイデンティティーを語る彼の言葉は、

京都弁ではなく、生まれ育った東京の標準語だったからだ。

彼の言葉は標準語だったが、心は京都の住人より京都らしいのかもしれないなかった。

水を得た魚のように創作に没頭し、京都や陶器を熱心に語る彼は、とても良い顔と眼差しをしていると私は思った。

そんな、彼の横顔を見ながら一日が過ぎて行く事が、私にはとても幸せだった。

二月最後の日、午後から京都の街に最後の雪がちらついた。

彼は、ギャラリーに足を運んでくれた客と、信楽焼きの話をしていった。

私は底冷えのする奥座敷から、火鉢に手をかざしている祖母と番茶を飲みながら、

満開に咲いている中庭の梅の花を眺めていた。

祖母は、火鉢の炭を見ながら言った。

「安奈はん。あの時の”蝶”は、あんさんの心に、まだ飛んどるんどすか？」

私は、梅の花から目を離さずに祖母に答えた。

「あの”蝶”は、あの晩に天に帰って行ったし、私の心には居てへんよ」

祖母は、私の横顔を見て言った。

「そつどすか・・・それやったら、良いんどす」

祖母は、私の顔を見つめて微笑んでいた。

私は祖母に微笑を返し、梅の花に目を戻した。

梅の花は、誰のためには無く、自分のために咲き誇っているのだと私は思った。

私も誰のためでも無く、私のために生きなければと改めて強く心に思った。

そして私は、さっきの祖母の言葉を心の中で自分自身に確認してみた。

今、私の作品の中に飛んでいる”蝶”は、あの晩の蝶ではないと確信した。

彼と私が新しい生活をスタートさせた冬の終わりに、

春の予感を感じた”蝶”が、何処からか私の心に舞い降りて来たのだと思った。

私は、中庭の梅の花を見ながら祖母に言った。

「おばあちゃん。中庭の梅も満開やし、あした北野の天神さんにお参り行こか？」

祖母はニッコリ微笑んで頷いた。

<完>

(後書き)

最後まで読んで頂き有難うございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4669g/>

---

京都の冬物語

2010年10月17日22時37分発行